

山の上の木と雲の話

小川未明

青空文庫

山やまの上うえに、一本ほんの木きが立たつていました。木きはまだこの世よの中なかに生うまれてきてから、なにも見たみことがありません。そんなに高たかい山やまですから、人にんげん間まも登のぼつてくることもなければ、めつたに獣けもの物ものも上のぼつてくるようなこともなかったのです。

ただ、毎まい日にち聞きくものは、風かぜの音おとばかりでありました。木きはべつに話はなしをするものもなければ、また心こころをなぐさめてくれるものもなく、朝あさから夜よるまで、さびしくその山やまの上うえに立たつていました。同おなじ木きでも、にぎやかな都と会かいの中なかにある公こう園えんにあつたならば、毎まい日にち、いろいろな物ものを見み、またいろいろな音おとを聞きいたであります。しかし、この木きはそんなことがなかつたのであります。

夜よるになると、遠とほくで獣けもの物もののほえる声こえと、永えい久きゅうに黙だまつて冷つめたく輝かがやほしひかりへともなく駆かけてゆく、無む情じょうの風かぜの音おとを聞きいたばかりであります。

しかし、この木きにただ一度ひと忘れわすれがたい思おもひ出でがあるのであります。それは、ある年としの夏なつの夕ゆう暮ぐれ方がたのことです。あんなに美うつくしい雲くもを見みたことがありません。その雲くもは、じつに美うつくしい雲くもでした。にこやかに笑わらっていました。体からだには、紅あか・紫むら・黄き・金きん・銀ぎん・あらくゆるまばゆいほどの華はなやかな色しき彩さいで織おられた着き物ものをまもっていました。髪かみは、長ながく、黄こ

金色の波のようにまき上がっていました。その雲は、おそらく大空の年若い女王で
ありましたでしょう。ゆうゆうと空を漂つて、この山を過ぎるのでした。

木は、魂まで、ぼんやりとして、ただ夢心地になつて、空を見上げていました。

「なんとという美しい雲だろう。あんな美しい姿のものが、この宇宙にはすんでいるのだ
ろうか？」

と、木は思つて、ながめていました。

すると、その雲は、ちょうど木の立つている山の上にさしかかりました。木は、見上げ
れば、見上げるほど美しいので、気も遠くなるばかりでした。このとき、ちょうど、鈴を
振るような、やさしい声をして、雲は下を見て、

「ああ、まつすぎない木だこと。風にも、雪にも折れないで、よく育ちましたね。ほん
とうに強い、雄々しい若い木ですこと。どんなにこの山の上に一人で立つてい
びしいでしょうね。しかし、忍耐をしなければなりません。わたしは、また、きつと、
もう一度ここへやつてきますよ。それまでは、達者でいてください。いろいろのおもしろ
い話や、珍しいこの世界じゆうでわたしの見てきた話をしてあげますよ。」と、木に向
かつて雲はいいました。

木は、ほんとうに夢とばかり思ったのです。そして、このときばかりは、自分ほど、幸福なもの世の中になくとも思いました。いつまでも木は、この美しい雲をば見ていたかつたのです。また、翼があつたら、自分も飛んで雲の後を追つて、いつしよに旅をしたいと思ひました。しかし、木には、もとよりそれができなかつたのです。そのうちに、だんだん雲の姿は、遠ざかつてしまいました。

その日から、木は、この雲の姿を忘れることができなかつた。そして、もう一度ここへやつてくるといつた雲の言葉を思ひ出して、毎日さびしい日を送つていました。

しかし、それからというもの、けつして、そのような美しい雲をば木は、見なかつたのです。夏も去つてしまひ、秋にもなつたけれど、この美しい雲は、ふたたび目のとどくかぎり、空に姿を現しませんでした。

木は、深い、深い、愁いに沈みました。毎日、山の頂を通る雲は、灰色の物悲しいものばかりでありました。

木が、こうして悲しみに沈んでいましたとき、からすがやつてきて、

「なんで、そんなに悲しんでいるのですか？」と、木に向かつて聞いたのであります。

木は、心の中の悲しみを隠していることができなかつた。そして、からすが、さも

しんせつにいつてくれましたので、木は雲の話をして、

「おまえさんは、羽があつて、遠いところまで旅をなさるから、もし、その雲をぐらんなつたら、私に教えてください。」と、木はからすに向かつて頼みました。すると、からすは、

「そうです。私は、海の方へも飛んでゆきます。また広い野原へも、ときには、村へも飛んでゆきます。けれど、このごろはどこへいつても、これと同じ曇った空色で、かつてそんな美しい雲を見たことはありません。私も気をつけていますが、もしつぐみがここにきましたら、よく聞いてごらん下さい。あの鳥は、諸国を飛びまわりますから……。」と、木に向かつていいました。

哀れな木立は、さも頼りなさそうに見えました。からすは、やがて別れを告げて去ってしまいました。それから幾日もたった冬のはじめです。つぐみが、どこからかやってきて、この木の枝に止まりました。木は、からすのいったことを忘れずに、さっそく雲の話をしました。

「つぐみさん、どこかでこんなような雲をぐらんになりましたか？」と、木は、鳥に向かつて聞きました。

敏捷(びんしょう) そうなつぐみは、小さく(ちひ)びをかしげながら、考(かん)えていましたが、

「あ、見(み)ましたよ。それは、ここからは、たいそう遠(とほ)いところであります。海(うみ)を越(こ)えて、あちらのにぎやかな都(と)会(かい)でありました。ある日(ひ)の晩(ばん)方(がた)、私(わたし)は、その都(と)会(かい)の空(そら)を、急(いそ)いでこつちに向(む)かつて旅(たび)をしていますと、ちようどあなたのおつしやる美(うつく)しい雲(くも)が、都(と)会(かい)の空(そら)に浮(う)かんでいました。下(した)には、とがった塔(とう)や、高(たか)い建(たて)物(もの)などが重(かさ)なり合(あ)って、馬(ば)車(しゃ)や、自(じ)転(てん)車(しゃ)などが往(おう)来(らい)の上(うへ)を走(は)っていました。そして、街(まち)の中(なか)は、たそがれかかつて、燈(と)火(び)が、ちらちらと水(みず)玉(たま)のようにひらめいていました。」と、つぐみはいいました。

これを聞(き)いていた木(こ)立(たち)は、深(ふか)いため息(いき)をもらしました。

「いまは、そんなに遠(とほ)いところに、雲(くも)はいつてしまつたのですか。」と、木(き)は、さびしさにたえられなかつたけれど、雲(くも)の無(ぶ)事(じ)なのを聞(き)いて安(あん)心(しん)いたしました。

「どうか、また、その雲(くも)をごらんになったら、私(わたし)のことをよく告(つ)げてください。」と、木(き)は、つぐみに頼(たの)みました。

「きつと、あなたのことを雲(くも)に告(つ)げますよ。私(わたし)は、もう明(あ)日(した)はここを去(さ)って、遠(とほ)くへゆきますから、また、どこかで、あ(あ)の雲(くも)を見(み)ますでしょう。」と、つぐみはいいました。

木(き)は、またこのつぐみとも別(わか)れなければなりませんでした。こうして、さびしく山(やま)の上(うへ)

に一人いつまでも残されたのであります。

それから毎日、情ない風は木を揺すりました。雪は、舞つてきて枝にかかりました。そして、明けても暮れても、灰色の雲は、頭の上をゆきました。

いつになったら、木は、あの美しい雲の姿を見るであります。また、夏がめぐつてくるには、長い間があつたのです。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 3」講談社

1977（昭和52）年1月10日第1刷

1981（昭和56）年1月6日第7刷

初出：「読売新聞」

1922（大正11）年3月22～25日

※表題は底本では、「山《やま》の上《うえ》の木《き》と雲《くも》の話《はなし》」
となっております。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：本読み小僧

2014年4月23日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

山の上の木と雲の話

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>